

Glocal Tenri



7

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.24 No.7 July 2023

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- 巻頭言
本席の「誕生」
／井上 昭洋 1
- 天理教の異文化伝道と「文化」の「翻訳」
(6)
本連載における「翻訳」について⑤
／加藤 匡人 2
- 台湾の社会と文化—天理教伝道史と災
害民族誌 (14)
戦前台湾における本島人信者の信仰形
態
／山西 弘朗 3
- 社会福祉からみる現代社会—天理教の社
会福祉活動に向けて— (9)
天理教社会福祉の理論的展開 (1) —そ
の到達点—
／深谷 弘和 4
- イスラームから見た世界 (25)
イスラームの宗教教育③—教えを学ぶ
こと—
／澤井 真 5
- コロンビアへの扉—ラテンアメリカの
価値観と教えの伝播— (28)
6. コロンビアの日常6：交通網の今昔
その2：二輪車
／清水 直太郎 6
- 図書紹介 (135)
成田和信著
『幸福をめぐる哲学—「大切に思う」
ことへと向かって—』
／金子 昭 7
- おやさと研究所ニュース 8
「イスラーム世界における哲学—当時と現
在」(オンライン) で発表／第64回印度学
宗教学会学術大会で発表／2023年度公開
教学講座のご案内／2022年度「教学と現代」

巻頭言

本席の「誕生」

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

前回、教祖が月日のやしろに定まる過程を教外研究者がどのように解釈したかを紹介した。今回は、飯降伊蔵の「本席さだめ」についての教外研究者による分析を紹介したい。

本席制定のプロセスにおけるトランス状態に伊蔵を導いた決定的な条件が、みきのもとで霊能的修行をつづけてきた結果、心身に刻み込まれた技法であったことはいまでもない。だが、異様な病を伴い、伊蔵を親神の代理として承認することを要求する語りは、それ以前の「おさしづ」とは大きく異なっており、修行の成果としての語りの技法というだけでは説明がつかない。前節で述べたように、伊蔵は非常に貧しい大工であり、<中略>、伊蔵の前半生は苦悩にみちたものであった。こうした「人間苦」がトランスと密接なかかわりがあることはよく知られている。それに加えて、伊蔵にとって重要な他者である教祖・みきの死、彼がほとんど生活のすべてをかけて支え守ってきた「親神」共同体の危機、またさきにのべた信徒たちの共同体維持への期待といったものが、培われてきた心身技法と結びつくことによって、伊蔵を「統御できない馮依状態」へと水路づけていったと考えられる。

教祖の神がかりについての解釈と本席の誕生についての分析は30年の時をおいてなされたが、「憑依」に対する視点、アプローチの手法は明らかに異なっており興味深い。前者が文学的な心理描写を想起させるのに対し、後者は精神医学的な診断を想起させる。しかし、いずれも神の存在を必要としない心理学的、社会学的ディスコースとみなすことができるだろう。一方、神がかりであれ、トランスであれ、ネイティブ(信者)の視点から見れば、そこに神や

霊魂が存在するのであり、その存在が措定されなければ神がかりやトランスを彼らの世界観の中に意味づけることができない。

ところで、これらの現象は文化人類学ではシャマニズムの研究において扱われてきた。シャマンとは、神や精霊との直接的な交流により、託宣、予言、治病をされるとされる宗教的職能者であり、彼/彼女を中心とする宗教形態がシャマニズムである。シャマンのトランスは、霊魂が抜けてトランス状態になる「脱魂型(エクスタシー)」と守護霊に取り憑かれてトランス状態になる「憑依型(ポゼッション)」に分類される。病気や不幸の原因を悪霊の憑依に求める憑物信仰が見られる社会では、後者のタイプのシャマンが多い。また、シャマンになる方法についても、神や精霊に選ばれてシャマンになる「召命型」と先輩シャマンのもと修行を続けてシャマンになる「修行型」に分類される。

いずれにせよ、天理教の教祖や本席もこのような文化人類学や宗教学におけるシャマンの類型化の射程に入ってくる。しかし、一見客観的に見えるこれらの研究も霊魂の存在とそれと交流する霊的能力の存在を前提としているかのようであり、ネイティブの視点との境界が曖昧だ。一方、そのような問題から離れたところで、教祖についての研究は教祖の心的内面を詳細に描写することで神がかりにアプローチし、本席についての研究は飯降伊蔵の置かれた状況の検証からトランスにアプローチしている。だが、前者はそうすることで神がかり自体を解体してしまい、後者は外的要因に基づいて分析してみせるが、依然としてトランスそのものはブラックボックスのままである。

[註]

(1) 永岡崇(2008)「飯降伊蔵と「おさしづ」の場—「親神」共同体の危機と再構築—」『宗教学研究』82(1), pp.143-166.

(2) 上掲論文, pp.154-155.